

異類婚姻譚から見る異形・異類との対峙：
昔話と神話を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒川, 麻実, 川上, 正浩, 坂田, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4498

異類婚姻譚から見る異形・異類との対峙 —昔話と神話を中心に—

児童教育学部 児童教育学科 黒川 麻実
学芸学部 心理学科 川上 正浩
学芸学部 心理学科 坂田 浩之

要旨：新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) による感染拡大の収束を願い、疫病を鎮めるとされる「アマビエ」がブームとなっている。また、これに伴い妖怪や幻獣への社会の着目度も高まりつつある。妖怪・幻獣を含む異形・異類は、古代から現代まで、人々の口から口へ、またメディアを介し伝承されてきた。本研究では、昔話と神話を中心に、人がどのような形で異形・異類と向き合い、関係性を築いていこうとしたのか、異類婚姻譚に着目し、心理学的・民俗学的視点から考察することで、異形・異類を新たな意味づけを持つものとして捉え直すことを試みた。そして、多様性の包摂や自然との関係の見直しが求められる今だからこそ異類婚姻譚から学ぶことが重要であることを論じた。

キーワード：異類婚姻譚、異形、昔話、神話、妖怪

1. はじめに

1.1. 「アマビエ」ブームと予言獣言説の再来

2020 年現在、疫病を鎮めるとされる「アマビエ」が注目を集めている。新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) による感染拡大の収束を願い、「アマビエ」を題材にした創作物やグッズ等が SNS を皮切りに、登場している。

「アマビエ」は一般的には妖怪と扱われているが、厳密には、湯本 (1999) や長野 (2005) によって称されているように「予言する幻獣」や「予言獣」¹ とされる存在である。1846 年に製作された瓦版には、



図 1 アマビエ (京都大学附属図書館蔵『新聞文庫・絵』p.84)

肥後国海中え毎夜光物出ル所之役人行見るニづの如く者現ス私ハ海中ニ住アマビエト申者也当年より六ヶ年之間諸国豊作也併病流行早々私シ写シ人々ニ見せ候得と申て海中へ入り右ハ写シ役人より江戸え申ル写也 弘化三年四月中旬 (新聞文庫, 1846, p.84)

という文言とともに【図 1】の「アマビエ」の姿が描かれている。この「当年より六ヶ年之間諸国豊作也併病流行」、そして「早々私シ写シ人々ニ見せ候得」から、流行病を予言し、これを防ぐ護符としての機能を持ったといえる。新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染拡大が心配される現代においては、この機能を持つ存在として注目が集められている。また、湯本 (1999) によれば、「アマビエ」の他にも、豊年や疫病を予言した幻獣として、「アマビコ」²、「神社姫」、「アリエ」、「豊年亀」[件]などが挙げられている。これらの幻獣の中には「アマビエ」と同様、災難避けの護符としての機能を持つ幻獣も存在する。また長野 (2005) は、「アマビエ」及び類似の予言獣が、文政期頃から明治初頭にかけて流行したこと、またその背景にあった、コロリ (コレラ) を初めとする流行病の存在を指摘している。コレラは感染すれば、激しい嘔吐や下痢が突然始まり、瞬く間に死に至る病であるが、コッホがコレラ菌を発見したのは明治 16 年 (1883 年) のことであり、それ以前は、現代における新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 同様、恐るべき未知の病であった。

すなわち、未知の疫病の流行とその対応策が確立されていない点において、江戸時代と現在の人々の置かれている状況は共通し、その中で、「アマビエ」を初め

とする予言獣の存在が、瓦版-SNSを介して民衆の間に広がり、心の支えとなっていった心理的・文化的現象は、時を越えて繰り返されている。

1.2. 時を越えて人々を魅了する異形の存在

こうした「アマビエ」ブームにより、妖怪や幻獣、怪異への社会の着目度も高まりつつある。山梨県立博物館では、「アマビエ」と同様に疫病を予言し拝むことで難を逃れることのできる幻獣「ヨゲンノトリ」³をSNSで公開し、新たなブームを引き起こしている。また、兵庫県立歴史博物館では、「驚異と怪異-モンスターたちは告げる」と題した特別展が人気を博した⁴。

一方で、妖怪・怪異が注目を浴びたのは、今回に限ったことではない。伊藤(2016)によると20世紀以前までは「公的な施設において怪異・妖怪の類は、非科学的な迷信に属する、教育にはそぐわない領域」(伊藤, 2016, p.30)として等閑視されてきたが、街おこしに幽霊や妖怪が起用されたこと⁵や、レベルファイブ制作のゲーム『妖怪ウォッチ』の爆発的流行などをきっかけとして、2015年には全国の博物館・美術館等で30を越える怪異・妖怪を主題とする企画展・特別展が公開された。

このような怪異・妖怪の類は、江馬(1922)によると、その登場は古代にまで遡るとされ、古事記における天窟戸の変の際の群妖、古事記・日本書記におけるヤマタノオロチや因幡白兔は妖怪のはしりであるとされている。

このように、人々に目撃され記録されてきた魔訶不思議な生物と称される幻獣や、実在/非実在の動物や幻覚・幻聴などに基づく神霊現象の一種とされる妖怪、または幽霊・魑魅魍魎・化物を含む「人ならざるモノ=異形・異類」は、古代から現代まで、人々の口から口を通し(口承)、またメディアを介し(書承)、伝承されてきた。一種の文化的遺伝子(ミーム)のように、人々の間を介し現在まで生きながらえてきたのである。

ではなぜ、人々は異形・異類に惹かれ、恐れ、時には救いを求めてきたのであろうか。本研究はこの、人ならざるモノであり、また醜さをもつモノである異形・異類に焦点を当て、人がどのような形で彼らと向き合い、関係性を築いていこうとしたのかを、心理学的・民俗学的視点から考察することで、異形・異類とは何かについて、その謎の一端を明らかにすることを目的とする。小松(2000)は、「妖怪研究は、人間研究でもある」(小松, 2000, p.449)と述べ、関連諸分野とも連携しつつ、人間の「心」の救済に深くかかわる学問

になるべきものであると、その将来性を期待している。様々な角度から異形・異類を検討することは、とりも直さず「人」そのものを検討することに他ならない。本研究では、古代より伝承されてきて、現在もおお「都市伝説」といった形やSNSでの流行といった形で人口に膾炙する異形・異類に焦点を当て、これらが「この世に存在しない迷信的・空想的な類のもの」では切り捨てられない、新たな意味付けを持つものとして捉え直していきたい。

2. 本研究で中心に取り扱う異類婚姻譚について

2.1. 異類と人間の関わりを描く異類婚姻譚

本稿では「異形・異類と人間の出会い」に関する語りのうち、如実にその様相が見て取れる「異類婚姻譚」に焦点を当て、これに対する検討を進めていく。異類婚姻譚とは広義には「人類と異類が関わり合う話」(吉田, 2009, p.12)であり、狭義には「ひとと動物との結婚」(小澤, 1994, p.26)を指す。すなわち、異類婚姻譚とは異形・異類と人間が婚姻関係を結ぶことに主題を置いた話の一種であり、そこに人間が彼らに何を求め、また異形・異類が人間に何を求めたのかが、鮮明に描かれていると考えられる。異類婚姻譚の背景に存在する様々な心理的・文化的意味を明らかにすることで、異形・異類の持つ魅力にさらに迫ることが可能であると考えられる。

2.3. 本稿における異類婚姻譚の考察範囲について

異類婚姻譚は現在、漫画・アニメ・ドラマ・映画・小説など様々なメディアにおいてモチーフや素材として扱われている。例えば高橋留美子による漫画『犬夜叉』(1996-2008:小学館)では、巫女の生まれ変わりである(出自は人間の家庭)日暮かごめが過去にタイムスリップし、大妖怪である犬の大將の父と貴族出身の母を持つ半妖の犬夜叉と出会うところから物語が始まる。犬夜叉は異類婚姻の結果生じた子という設定である。そして、その続編にあたるTVアニメ『半妖の夜叉姫』(2020年10月放送開始)では、犬夜叉と日暮かごめの子(夜叉姫)が登場する。

また、細田守監督・スタジオ地図制作の『おおかみこどもの雨と雪』(2012:東宝)では、人間と狼の交雑によって生まれた半獣人である「彼」と人間である花との間に出来た二人の子、雨と雪が周囲との軋轢を乗り越えながら自身の生き方を見いだしていく話であるが、これも一種の異類婚姻譚として位置づけることができる。

このように異類婚姻譚は現在においても扱われ続け、また人々を虜にしてきたモチーフであるが、こうした異類婚姻譚の現代的意義を考える上で、まずその成立過程や背景の整理を行う必要があると考えられる。そこで本稿においては、昔話や神話における異類婚姻譚に焦点を当て、様々な異類婚姻譚における、話の種類や内容を分類し、そのうえで、それらの話がどのような意味を持っているのかについて検討を行う。

3. 神話に見られる異類婚姻譚について

3.1. 異類婚姻譚の源流・同根とされる神話の扱い

まず、本研究で扱う神話・昔話の定義と神話・昔話の関係性及び異類婚姻譚の派生状況について触れる。

神話とは、大自然から人文に至る宇宙の営みの始原(国土・人類・文化の起源)を求め、それを超自然の靈格(神々)の行為として説明するものである。一方、昔話とは、「昔々」の遠い昔として語るものであり、「ある所」の「ある人」の物語として固有性を保持しないが、その叙述において一定の形式が約束されている、不確かな虚構の物語である(福田, 2000)。

神話と昔話は原始時代から併行して存在し、それぞれの機能なども異なっているが、時と場合によってはお互いが交流し合い、神話から昔話へ、また昔話から神話へ派生する場合もあったと考えるのが現在の主流である(三浦, 1999)。

一方で異類婚姻譚に関しては、柳田が「説話の信仰上の基礎が全く崩壊せず、従ってこれを支持した伝説はもとより、その正式の語りごとが僅かながら残っていたもの、たとえば蛇入郎のごとき一部の異類求婚譚」(柳田, 1942, p.11)と述べ、小林が異類婚姻譚の発生起源について「異類である神と人間の結婚により、神の子が人間界にもたらされ、一族の祖となる始祖伝説が原話であると考えられている」(小林, 2007, p.47)と指摘しているように、神話に源流がある、または同根を持つと考えられている(三浦, 1999)。

そこで本稿においては、まず神話の異類婚姻譚について整理することによって、後の昔話の異類婚姻譚の源流がどのようなものであったのかについて検討する。

3.2. 神話の中の異類婚姻譚

まず、神話における異類婚姻譚について整理する。

小島(2004)は日本上代期の神話における異類婚姻譚について『古事記』・『日本書紀』・『風土記』・『日本霊異記』などから13話挙げている。本稿ではこれらの資料を参照した上で、似たような筋を持つ話をまとめ、

さらに異類聾・異類嫁ごとにカテゴリー分けを行う。また神話は後述する昔話のように話型名称がないため、話型名を振り、【表1】に示す。

表1 神話における異類婚姻譚の一覧

異類婚姻	
異類聾	異類女房
・神入聾(蛇型)	・和邇女房
・神入聾(矢型)	・蛇女房
・蛇入聾	・狐女房
	・亀(竜宮)女房
	・白鳥女房(羽衣伝説)

「異類聾」すなわち異類の男と婚する話のうち、文献として最古のものは『古事記』の「三輪山伝説」(中巻: 神武天皇)であるとされている(関, 1940, p.24)。これは【表1】中における「神入聾(蛇型)」にあたる。概要は以下の通りである。

美しい形姿のいくたまよりびめ活玉依毘売の元に立派な身なりの男が通い、姫は身ごもった。男の正体を知りたいと思った父母が、娘に男の裾に糸を縫い付けさせた。明るく日その糸を辿っていくと、戸の鉤穴を抜け、美和山の神の社に辿り着き、男の正体が三輪山の神であったことが判明する。

なお、子はおほたたねこ意富多多泥古と称され、神の子としての扱いとなる。【表1】中の「異類聾」はこの話と大筋において同じ話が多いが、神入聾(矢型)ではほと(女性器)に矢が刺さり人間が懐妊し、蛇入聾では結末部分において、人間が殺害されるものや、異類とその子が死ぬものなど様々である。

「異類女房」すなわち異類の女と婚する話については、『古事記』や『日本書紀』に記されている「豊玉毘売(豊玉姫)」「和邇女房」の伝承や、『近江国風土記』や『丹後国風土記』に見られる「羽衣伝説(白鳥処女説話)」「羽衣伝説」が挙げられる。「和邇女房」は次のような話である。

海神の娘である豊玉姫が彦火火出見尊(山幸彦)の子を宿し、陸の産屋で出産する際に中を見ないように願ったが、山幸彦が我慢できずこっそり覗くと、姫は八尋和邇に姿を変えており、覗き見られたことを恥じ子を置き海に去った。子はその後、姫の妹と結婚し、後の神武天皇が誕生した。

上述のように、子はその後、姫の妹（叔母）と結婚し、後の神武天皇の系譜へと続く。すなわち、天皇の系譜が人と神の両方の血を引くものであることを説明するデバイスとして、この異類婚姻譚が機能していることがわかる。【表1】の「蛇女房」では「和邇女房」とは異なり、女の姿を見た男が逃走する。また「狐女房」では犬によって姿が露見した狐が子を残して去ってしまうが、その子は「狐直」の始祖となる力強い人物となる。ここでも、異形・異類の血を引くものが、一般の人間にはない「力」をもった存在となっていることは興味深い。日本上代の異類婚姻譚を分類し、分析した小島（2004）においても、この日本上代の異類婚姻譚においては、その血を引く「子」は、神として祭られたり、神を祭るものとなったり、「優れている」存在であったりすることが指摘されている。

「亀（竜宮）女房」は、現在も良く知られている「浦島太郎」と大筋が同じであり、「白鳥女房（羽衣伝説）」も同様のため割愛する。なお後者は採録されている書物により結末が異なる。『近江国風土記』を始めとする「近江型」では、天女が水浴中に、天女の美しさに心を奪われ、天に帰すまいとした男によって羽衣を盗まれて、天に帰れなくなる。その後、やむを得ず男の妻となり子をもうけるが、やがて羽衣を見つけ、天に帰ってしまう。

これらの異類男／女房が、異形として姿を現す場合の法則と男女の違いについて小島（2004）は、

人間の姿で婚姻の相手と出会い婚姻をなすが後に異形を表すという話型の結末は、必ずその異形を見たことによる破局となる。この破局が人間の女に起こった場合、女は必ず死ぬ。人間の男に起こった場合は死なずに別離を迎える。婚姻というものが男女に与える影響力のちがいを表わしているのかもしれない。（小島，2004，p.66）

と述べている。また「異類は、婚姻には必ず人間の形をとって臨む」（小林，2004，p.66）とされ、後述する昔話における異類婚姻譚とは異なる形をとっている。

このように、神話に見られる異類婚姻譚においては、神や天や仙境の存在との結婚がベースとなっており⁶、「神との神秘的で暴力的な関係を語る」（岡部，1999，p.10）もの、また「イレギュラーとしての神との遭遇」（岡部，1999，p.10）が描かれたものとなっている。加えて、異類が異形としての姿を露呈すると破局してしまうという、「見るなの禁」を破ったがために別離する

というモチーフを持ち合わせている。

4. 昔話に見られる異類婚姻譚について

4.1. 昔話の異類婚姻譚の話型一覧

次に、昔話の異類婚姻譚について整理する。『日本昔話大成』⁷（関，1979）によると、「本格昔話」に位置づけられる「異類婚姻譚」は「異類聾」、「異類女房」に大別される。また小澤（1994）はさらに「異常誕生」のうち二話（田螺息子、蛙息子）を異類婚姻譚に含め、その話型を整理している。本稿では、異形・異類との対峙に焦点を当てるため、「五 異常誕生」に加え、さらに「十三 逃避譚」の中の2話「鬼の子小綱」・「食わず女房」を異類婚姻譚に含めこむ立場をとった。以上より、関や小澤の分類を元に、異類婚姻譚が見られる昔話を本研究の視点からピックアップしたものが【表2】である。

表2 昔話における異類婚姻譚の一覧

四. 異類婚姻	
A 異類聾	B 異類女房
蛇聾入・苧環型(101A)	蛇女房(110)
蛇聾入・水乞型(101B)	蛙女房(111)
河童聾入(101C)	蛤女房(112)
鬼聾入(102)	魚女房(113A)
猿聾入(103)	魚女房(113B)
蛙報恩(104A)	竜宮女房(114)
蟹報恩(104B)	鶴女房(115)
鴻の卵(105)	狐女房・聴耳型(116A)
犬聾入(106)	狐女房・一人女房型(116B)
蜘蛛聾入(107)	狐女房・二人女房型(116C)
蚕神と馬(108A)	猫女房(117)
蚕由来(108B)	天人女房(118)
木魂聾入(109)	笛吹聾(119)
五 異常誕生	
田螺息子(134)	蛙息子(135)
十三 逃避譚	
鬼の子小綱(274A・274B)	食わず女房(244)

なお【表2】の括弧内の3桁の番号は、『日本昔話大成』に基づき記載している。昔話の異類婚姻譚は、神話に比べ、ヴァリエーションが豊かであり、異類の種類も多種多様であることがわかる。

4.2. 昔話に見られる異類聾の内容

次にこれらの昔話について、その描かれている内容

に基づき、川森（1993）や小澤（1994）の分類を参考にしつつ、【表3】、【表4】のパターンに類別し、異形・異類と人間の、どのような関係性が描かれているのかを分析する。まず、異類婚姻が成立しているかを見做せるのか、最終的に成立しなかったと見做せるのかで「婚姻成立型」と「婚姻不成立型」とに大きく分類を行うことが可能である。そのうえで、「どのような形で」その婚姻が成立し得たのか、あるいは成立し得なかったかによって、「婚姻成立型」、「婚姻不成立型」それぞれをサブタイプ化することを試みる。ただし、「どのような形で」については、異類聾譚、異類女房譚で違いがあると考えられたため、別々にパターン化を行った。

【表3】は異類聾譚について取り上げたものである。

表3 異類聾譚のパターン

婚姻成立型	変身婚姻型	子を望んだ夫婦の元に生まれた異類がそのままの姿で人間に嫁入りし、その後人間に変身し結婚を成就する	田螺息子 蛙息子
婚姻不成立型	計略的殺害型	異類が変身せずに嫁を要求する。人間の女もしくは親が計略を用いて異類の男を殺し、異類の男との結婚を解消する	蛇聾入（水乞型） 河童入聾 鬼聾入 猿聾入 蛙報恩 蟹報恩
	婚姻逃避型	強制的に異類と結婚させられた人間の女が、異類の元から逃避する	鬼の子小綱
	墮胎型	異類が人間の姿に変身し、人間の女に子を残す。しかし男の計略に気づき、子を墮胎する	蛇聾入（苧環型）

なお【表3】に記載されている「蚕神と馬」・「蚕由来」・「犬聾入」・「蜘蛛聾入」・「木魂聾入」は異類との直接的な婚姻を語っていないため、ここでは除外した。また、【表2】では「異常誕生」に含まれていた2話は、内容から異類聾譚に属すると判断した。

話型の数だけで見ると、婚姻不成立型が多いことがわかる。また、日本でよく見られる異類聾譚は川森（1993）によると「猿聾入」、「蛇聾入（水乞型）」であり（川森、1993）、これらは婚姻不成立型に属する。す

なわち、日本の昔話に見られる異類聾譚は婚姻不成立型が主流であるといえる。

では、婚姻成立型の昔話にはどのようなものがあるのだろうか。本項では「田螺息子」を取り上げる。

子のない爺と婆とが神に祈願すると、田螺が産まれる。成長した田螺が器用に馬に乗り、長者に年貢を納めにいくと、長者は田螺を珍しがり、末娘を嫁に出す。二人は仲良く暮らしていたがある時、田螺の殻が割れてしまう。すると、中から普通の大きさの人間の男が現れる。二人は老夫婦と共に末永く幸せに暮らした。

「蛙息子」も同様の筋を持ち、異形・異類から人間の変身は話型・サブタイプ毎に異なる語られ方をしている。柳田（1942）はこれを一寸法師や桃太郎と同系統のものと捉えており、小澤（1994）はギリシアにも同類の話があると述べている。桃太郎が異形・異類であるか否かは議論がわかれるところであるが、一寸法師については、異形・異類であると判断して良いだろう。そして、打ち出の小槌により、一寸法師が「大人」のサイズに「変身」することにより、姫との婚姻が成立することになるというストーリーは、「田螺息子」「蛙息子」と重なるものであると捉えることができる。

次に婚姻不成立型の昔話を取り上げる。計略的回避型のうち「猿聾入」は以下のような話である。

爺が干上がった田で、水を満たすものに嫁をやる」と独語する。すると猿が現れ水を満たし、翌朝、娘を嫁として連れて行ってしまふ。娘は里帰りのとき餅を入れた臼を猿に背負わせ、途中で桜の一枝を土産にと猿に枝を折らせると、臼の重さで猿は川に落ちて流され、娘は家に帰ることができた。

上述した「猿聾入」は、「里帰り型」と呼ばれるもので、他にも「猿聾入-嫁入り型」、「猿聾入り-火焚き娘型」などのサブタイプが存在し、前半も上記の水乞型の他に畑打型などがある。また、【表3】に示した通り、「蛇聾入（水乞型）」、「河童聾入」、「鬼聾入」などとほぼ同じ筋である。異形・異類の行動に特に非がないのにも関わらず死んでしまうという不条理な結末は、小澤が「日常的感觉からくる嫌悪感」（小澤、1994, p.38）と述べているように、異形・異類に対する無意識/意識的な拒絶や婚姻への背徳感からくるものであ

ると考えられる。

次に、婚姻回避型にあたる「鬼の子小綱」は次のような話である。

鬼が娘を誘拐し、そのまま妻とする。娘の爺は、娘を探し、鬼ヶ島で再会し、鬼の手を逃れ脱出する。しかし娘は鬼の子を孕んでおり、鬼の子小綱を産む。しかし小綱は大きくなるにつれ人を食いたい衝動に耐え切れず、里を追われてしまう。

この話は逃避型としての色彩が強く、また節分由来譚としても有名である。娘が異形・異類との婚姻状態を拒んだこと、また異形・異類の子が人との暮らしに馴染めなかったという点から、やはり異形・異類が拒絶すべき対象であることが暗示されている。

最後に婚姻不成立型の墮胎型にあたる「蛇聾入（苧環型）」を取り上げる。

娘のもとに、美しい男が毎晩通うようになる。しかし男の正体を不審に思った両親が、男の着物の裾に糸をつけた針を刺すよう娘に指示する。翌朝その針を辿っていくと、大きな淵（洞）の中まで続き、男の正体である瀕死の蛇とその母蛇が話しているのが聞こえた。蛇は、「娘の体には自分の子供が宿っている。娘が節句の酒さえ飲まなければ、子は決して死ぬことはない」と話す。これを聞いた娘と母は、酒を飲み、子を墮ろす。

これは、先に取り上げた「三輪山伝説」と中盤までは似たような筋（プロット）であるが、その子が墮されるという結末が、大きく異なっている。これを柳田（1942）は信仰の対象であったものの衰頹の影であると述べており、すなわち異形・異類が信仰される対象（三輪山主神）から嫌悪される対象（蛇等）へ墮ちてしまったことを意味していると考えられる。

4.3. 昔話に見られる異類女房の内容

次に、異類女房譚における婚姻関係の成立不成立と、「どのような形で」その婚姻が成立し得たのか、あるいは成立し得なかったにおけるパターン化について論じる。異類女房の「昔話」のパターンは【表4】のとおりである。

まず、異類女房譚については、異類聾譚と同じく、婚姻不成立型が多い。特に、「鶴女房」、「蛇女房」が日本において著名である（川森, 1993）ため、日本の昔

表4 異類女房譚のパターン

婚姻成立型	変身婚姻型	人間の男と結婚を望んだ異類の女が人間に変身し、人間の男との結婚を成就する	(猫女房)
	婚姻難題型	人間の男と結婚した異類の女が、人間の男に降りかかった難題を解決し、その後幸せに暮らす	竜宮女房 笛吹聾
婚姻不成立型	禁忌別離型	異類の女が人間の姿に変身し人間の男の元に嫁ぐが、正体が露見したため、人間の男との結婚が解消される	蛙女房 蛤女房 魚女房 鶴女房 蛇女房 狐女房
	婚姻逃避型	異類の女が人間の姿に変身し人間の男の元に嫁ぐが、正体が露見したため、人間の男との結婚が解消され、女は殺害される。	くわず女房
	婚姻難題型	人間の男と結婚した異類の女が、人間の男に降りかかった難題を解決できず離れ離れになる	天人女房

話に見られる異類女房譚は婚姻不成立型が主流であるといえる。一方の婚姻成立型においては、異形・異類が難題を解決することにより、婚姻が成立することとなる。「婚姻難題型」が異類女房譚では特徴的である。

ここでは、婚姻難題型のうち、「竜宮女房」について取り上げて解説する。

男が山の花を水中に献じたところ、大亀が現れ男は竜宮に招かれ歓待される。地上に戻る男に竜王は望まれた通り娘を献上し、男は竜王の娘を嫁にし、地上に戻る。ところがそれを羨んだ殿が男に難題をけしかけるが、龍王の娘がそれを次々と解決し、最終的に男・娘・男の母親の三人で幸せに暮らす。

「笛吹聾」も同様に、異形・異類の女が為政者から課せられた課題を解決することによって幸せを手に入れるという筋であり、御伽草子の『梵天国』の派生にあたると柳田（1938）は述べている。

変身婚姻型は以下の「猫女房」のみである。

男が長年可愛がっていた猫に「お前が人間だったら」と望んだところ、碾臼を挽いて男を助けるようになる。しかし畜生のままでは恩返しができないと、猫は伊勢参りに行き、神の御加護によって人間の姿になり、人間の男と夫婦になり幸せに暮らした。

これは岩手県と長崎市の2例しかなく、また共通の筋を持たないため、昔話としては特殊例として孤立している(川森, 1993)。また河合(1982)は「誰かが最近になって作ったものではなかろうかとも思っている」と日本の昔話として扱うことに疑問を呈している。ただ、「田螺息子」と同様に人間の姿に変身することによって婚姻状態を担保できている点は明記しておく。そして「竜宮女房」、「笛吹聲」における異類の嫁は、後述する鶴や蛇、狐などの動物というより、比較的人間に近い姿をしている。

次に、婚姻不成立型について取り上げる。婚姻難題型にあたる「天人女房」は、神話の項で取り上げた「羽衣伝説(白鳥処女説話)」と途中までは同様であるため、その続きを記す。

天に戻った異類の嫁に再会するために、男は天へ赴き、天女の父親から難題を課せられる。妻の助言で難題を果たしていくが、最後に瓜の切り方を誤り、瓜から流れ出した水が天の川になる。

このように、一部の類話は七夕の由来譚にもなっている。「竜宮女房」の難題が解決できなかったパターンとしても見て取ることができる。

最後に、婚姻不成立型の禁忌離別型のうち、異類婚姻譚の代表格ともいえる「鶴女房」を取り上げる。

男に助けられた鶴が人間に姿を変えて嫁に来る。嫁は、決して覗くなど約束をさせ、機屋で、高値で売れる布を織り続ける。不思議に思った男が機屋を覗くと、自身の羽を抜いて布を織る鶴の姿があった。正体を知られた鶴は男の元から姿を消す。

なお男が老夫婦になるヴァリエーションも存在するが、これは報恩譚にあたり異類婚姻譚としては扱わない。同系統にあたる「蛇女房」は、人間の男が蛇を助け人間に姿を変えて嫁に来るという「報恩型」までは共通しているが、その続きが異なるため以下に記す。

嫁はその後妊娠し、自分の出産を決して覗き見ると約束させるが、男が覗き見たところ、蛇の姿の嫁を発見する。姿を見られた蛇は、乳の代わりに子になめさせるようにと、片方の眼を残し去る。しかし不注意により眼を無くした男は、蛇に再び眼を要求する。しかし今度は床の間に飾った眼によって金持ちになったことを怪しんだ村人によって眼を盗まれた。事情を知った蛇は災害を起こし、村を壊滅させる。

結末部分の派生としては、眼を無くした蛇が男に昼夜が分かるように鐘を鳴らすように求め、男は約束を守り続けた、などといったものがある。また「蛤女房」・「魚女房」では排泄物を汁に混ぜる場面が目撃され、「狐女房」の場合は、残した子が偉大な存在になる。こうしてみると、神話の項で取り上げた「豊玉姫」の伝承が、地域や伝承過程において、文芸的要素が付け加えられ、またより暗喩的表現をもって変容していったものであると考えられる。またこれらの話に共通して「見るなの禁」のモチーフが必ず登場する点に特徴を持つ。

最後に、婚姻逃避型にあたる「食わず女房」を取り上げる。

人間の男が、飯を食わずよく働く嫁を望んだところ、願い通りの女が現れ嫁になる。しかし糧の減り具合を怪しんだ男が留守中の女を覗き見たところ、頭頂部の口から握り飯を食らう女の姿を発見する。男が離縁を申し出たところ、嫁は本来の姿である山姥に戻り、男を拉致する。男は逃走し、菖蒲の生えた湿原に身を潜め、山姥は男の追跡を諦める。

この話では、異形・異類の女側から「見るなの禁」を課せられたわけではないが、異形・異類の姿が露見したため、婚姻状態は解消され、さらに男が追われる形となっている。また、禁忌離別型より男の欲が深く、自業自得的な内容になっている。

5. 異類婚姻譚に見られる異形・異類の存在に対する文化的・心理学的検討

5.1. 異類婚姻譚に見られる異類の正体

以上、神話・昔話に見られる異類婚姻譚の系譜を整理すると共に、それぞれの話型とプロットについて確認し、異形・異類との出会いと別れについて整理した。

改めて、異形・異類の正体についてまとめると【表5】のようになる。異形・異類の男は㊦、異形・異類の女は㊧と明記し、神話については太字で示す。

表5 異形・異類の正体のパターン

神や神に近い存在		妖怪
三輪山主神(矢・蛇)㊦・八尋和邇㊧・亀㊧・蛇㊧・天女(白鳥)㊧・竜王の娘㊧・天帝の娘㊧		鬼㊦・河童㊦・山姥㊧
動物(山)	動物(両棲)	動物(海)
猿㊦・狐㊧・鶴㊧・猫㊧	蛇㊦・蛇㊦・蛇㊧	田螺㊦・蛙㊦・蟹㊦・亀㊧・蛇㊧・蛙㊧・蛤㊧・魚㊧

神話の異類については神か神以外かの判断については、内容から論者が定めた。また、これらの異形・異類の動物については地域によって出現が異なっており、サブタイプまで反映させると多くの動物が登場するため、【表2】中に登場したもののみを抽出した。なおサブタイプにおける異形・異類の動物について、中村・弓良・間宮(1987)は、異類婚姻譚の「動物聳/嫁の交替」として、「蛇聳入」の蛇に替わり「狐・狸・猫・蛙・イモリ・鱈・鰻・魚・田螺・蜘蛛・ムカデ・毛虫」が登場すると分析し、特に東北地方では交替しうる動物の種類が圧倒的に多いと述べている。また、【表5】で示したように、神話においては、神や神に近い存在が異形・異類として登場するのに対し、昔話においては先述のようにさまざまなヴァリエーションの異形・異類が登場し、「忌避すべき存在」との婚姻譚として語られている。それに伴い、神話においては「優れている」存在(小島, 2004)として語られる異形・異類と人間の間の子どもが、「忌避されるべき存在」として描かれていることも注目し値する。もちろん小島(2004)が指摘するように、神話において異形・異類が女性である場合、その本体がワニ、蛇、亀、白鳥、狐、と多様である一方で、異形・異類が男性である場合、その素性は三輪山の太物主神、雷神、蛇とかなり限定されている。異形・異類の女性は、そのほとんどが水と関連を持つ一方で、異形・異類の男性は、山と関連を持つことが指摘され、「異類が男性か女性かで話の性質が変わっていることは明らかである」(小島, 2004, p.68)と結論づけられている。さらに小島(2004)は、上代神話の異類婚姻譚における「性差」について、異形・異類が女性である場合、人間の男性が女性の居場

所を訪れ、異形・異類が男性である場合は、異形・異類が人間の女性を訪れる、という形で「男性が女性を訪問する」という婚姻の形が通常の婚姻譚を含めて、婚姻譚としての普遍的なあり方であることを指摘している。これは小澤(1994)が「日本の異類婚姻譚では、すべての話において異類であるパートナーが、人間である主人公のもとに来訪している」(p.209)と指摘していることとは対照的である。

以上のことは、異形・異類が忌避されるべき対象であるかどうかという、異類婚姻譚そのものの成立背景に存在する異形・異類との関係性を反映していると考えられるべきであろう。

5.2. 異類婚姻譚に見られる異形・異類の存在に対する心理学的検討

異類婚姻譚に関して心理学では、河合(1982)が「異類女房の話は、全世界のなかで、我が国とその近隣諸民族にのみ特異的に語りつがれていると言っていいほどのものであり、日本人の心について考える上で、極めて重要なものである」(河合, 1982, p.171)と述べて以来、重要な手がかりとなっている。河合(1982)は、異類婚姻譚における異類が人間に対する自然を表し、異類婚姻譚が人間と自然の関係、あるいは心の中の意識と無意識の関係を表すものとして考える視点を提案している。また、異類女房を、自然とのつながりを保存したまま(そのことを秘めて)確立しようとする日本人の自我の姿を表すものとして、自然を断ち切る男性の英雄として表される西洋の自我と対比的に捉えている(河合, 1982)。

さらに、「鬼の子小綱」に関しては、怒りではなく笑いによる解決を描いたものとして、また、人間と鬼の間にできた片子の悲劇として論じられ(河合, 1982)、その後も発展的に論じられている(河合, 1989)。特に、人間の方に好意的で人間の救出に力をつくすのに、半鬼半人であるため人間世界におれず、消え去ったり、人間界で暮らせないので父(鬼)のところに戻ったり、人が食べたくなくなってきたので頼んで殺してもらったり、小屋をつくって入り自ら焼け死んだりしている点が、因果応報の観点からは不可解であると注目している(河合, 1982)。そして、「片子という異分子の存在を許さない一様性を尊ぶ社会の在り方、世間の力には抗しがたいとして、わが子の自殺を黙って見ている両親の態度、それらを日本人における母性の優位性」と結びつけて考える視点を提案している(河合, 1989, p.255)。さらに、現代人の課題は「片子を排除することなく、

あくまで生かし続け、彼が想像するファンタジーを受け容れてゆくことである」(河合, 1989, p.266)と結論づけている。

また、河合(1982)では、片子と類似した存在として「何ともいえぬ見つともない顔で、臍ばかりいじって」いる醜い童である火男ひやっこについても取り上げられている。そして、火男が主人公に対して素晴らしい富をもたらす点に関して、「無意識界から産出されるものは、意識の視点から見ると、最初は醜くつまらぬものに見えるが、それを適切に取り扱う限り、意識的判断を超えた価値あるものとなることを示している」(河合, 1982, p.237)と論じられている。このように捉えれば、火男も、その醜さの表現は異形・異類であることを示唆するための描写であるとも言える。

一方、北山(2001)は、異類婚姻譚について、特に鶴女房を取り上げながら、異類を、甘えを許し、献身的に欲を満たしてくれる理想的な対象の醜い(見にくい、直視できない)姿を表すものとして捉えている。つまり、「見るな禁止」を破って目の当たりにする異類の姿は、授乳と育児で消耗し、出産で死んでいった母親である。要点は理想的な対象の傷つきやすさや限界に急激に直面しての幻滅であり、母親に限らず、治療者などとの間でも生じうる体験であり、さらに神、自然などに広げて考えれば、河合の論に近づいていくだろう。そして、醜い異類の姿を見たならば、逃げ出さずに直視して、自らの傷つきやすさや限界を認めつつ、「返せる恩と返せない恩の両方を体験して、とくに返せない恩の「すまなさ」を噛みしめることから生まれる何か(感謝など)も含む」(北山, 2001, p.175) 本当の「恩を知る」ことが求められる(北山, 2001)。

以上のことから、異類婚姻譚は、心理学的に、自然と人間との関係、醜く見えるが価値のあるヨソモノ(他者性)との関係、急激な幻滅体験を象徴する物語だと捉えることができる。そして、本研究で分類した異類婚姻譚のヴァリエーション、あるいは、河合(1989)や北山(2001)が論じた異形・異類との関係についての課題は、今の私たちが、自然や異質な他者との関係を新たに結び直し、急激な幻滅体験を乗り越える上で、手がかりとなりうるものである。

6. おわりに

以上、異類婚姻譚について、成立経緯を整理し、神話・昔話における話の内容や、それが文化的・心理学的に何を示しているのかについて検討した。

異形・異類とは辞書的な意味においては、「普通と違

う異様なもの」である。これらの存在と婚姻関係を結ぼうとすると、例えば田螺息子のように異類が人間化する場合を除き、急激な幻滅体験を踏まえ最終的に破綻する結末を迎えてしまうことが多い。また異類と人間の子である片子は、「普通」とは違うため、「生きにくさ」を抱えこんでしまう。

鈴木(2016)は「異形」について、

自らが「異形」であることは、本人にとって当然「普通」のことである。「異形」なものが存在することが世界にとっての「普通」である。(中略=論者)「異形」について考えていくことは、「普通」の側に立つ(と思っている)者の視線や世界観をゆさぶるのみならず、「普通」と「異形」の境目を曖昧にしたり、立場を反転させてみたりすることを可能とする(鈴木, 2016, p.27)

と述べる。このように、異類婚姻譚を通して「普通とは違うもの」、すなわち異形としてマイノリティが抱える「生きにくさ」の正体を見つめなおし、普通という言葉の暴力性、多様性の包摂を考えるきっかけになるとも考えられる。そして現在、自然災害や新型コロナウイルスによって、自然との関係が問い直される今だからこそ、自然としての異類、他者性としての異形と人間との関係性を描いた異類婚姻譚から学ぶことが必要ではないだろうか。また、物語が語り手の心のあり方を示すものならば、現代の物語がどのように異形・異類との関係性について語っているのかについて検討することも意味がある。本稿では俯瞰的観点から、神話・昔話における異類婚姻譚を明らかにしたが、引き続き、異類婚姻譚がどのように語り語られているのか、異類婚姻譚のもつモチーフの現代的意義を、その背景に存在する人々の心性に着目しながら解き明かしていきたい。

【注】

- 1 湯本(1999)「予言する幻獣:アマ彦を中心に」や、長野(2005)「予言獣アマビコ考:「海彦」をてがかりに」などの論文表題に記された通りである。
- 2 湯本(1999)によると「アマビエ」は「アマビコ」の誤記であり、「アマビコ」を写し間違えた可能性が高いとされている。
- 3 「ヨゲンノトリ」とは、市川村の名主、喜左衛門が記した『暴瀉病流行日記』に登場する、二頭を有

する鳥の絵及び説明に記された内容から、山梨県立博物館が名付けた幻獣である。(山梨県立博物館 HP より)

- 4 巡回展「驚異と怪異—モンスターたちは告げる—」(兵庫県立歴史博物館: 2020年6月23日~2020年8月16日)
- 5 水木しげるロード(1993年~: 鳥取県境港市)、八日市は妖怪地(1999年~: 滋賀八日市)妖怪ストリート京都(2005年~: 京都府京都市)おぼけ妖怪村(2008年~: 徳島県三好市)などが代表的なものとして挙げられる
- 6 小島(2004)によると、純然たる動物が人間と婚する話は『日本霊異記』まで待たなければならぬ、としている。
- 7 明治末年から昭和51年の間に語りてから直接採集された沖縄県から青森県、及びアイヌ民族の昔話、約34000話を収録し、話型のタイプインデックスとして整理されている。

【引用文献】

- 伊藤慎吾(2016)『妖怪・憑依・擬人化の文化史』笠間書院
- 江馬務(1923)「妖怪変化の沿革」『日本妖怪変化史』中外出版(小松和彦編(2000)『怪異の民俗学2: 妖怪』河出書房新社、9-35)
- 岡部隆志(1999)「憑依と神婚: 異類婚姻譚の発生」『日本文学』48(5)、1-10
- 河合隼雄(1982)『昔話と日本人の心』岩波書店
- 河合隼雄(1989)『生と死の接点』岩波書店
- 川森博司(1993)「異類婚姻譚の類型分析: 日韓比較の視点から」『国立歴史民俗博物館研究報告(50)』、385-406
- 北山修(2001)『幻滅論』みすず書房
- 小澤俊夫(1994)『昔話のコスモロジー: ひとと動物との婚姻譚』講談社
- 小島恵子(2004)「日本上代の異類婚姻譚について」『湘南短期大学紀要(15)』、72-64
- 小林真由美(2007)「『日本霊異記』の異類婚姻譚: 神話から仏教説話へ」『成城国文学論集31』、35-53
- 小松和彦(2000)「妖怪: 解説」『日本妖怪変化史』中外出版(小松和彦編(2000)『怪異の民俗学2: 妖怪』河出書房新社、433-449)
- 鈴木愛理, 仁平政人, 平井吾門, 山田史生(2016)「逸脱する文学教材: 「異形」篇」『弘前大学教育学部紀要(116)』、19-28
- 關敬吾(1940)「蛇聾入譚の分布」『民族學研究』6(4)、439-472
- 長野栄俊(2005)「予言獣アマビコ考: 「海彦」をてがかりに」『若越郷土研究』49(2)、1-30
- 中村とも子・弓良久美子・間宮史子(1987)「異類婚姻譚に登場する動物: 動物婿と動物嫁の場合」『口承文藝研究(10)』、84-102
- 東原伸明(1999)「ジャンルの規定: 昔話・神話・物語 - 天人女房譚・異類婚姻譚の〈語り〉と〈言説〉を比較検討して」『高知女子大学文化論叢(1)』、93-80
- 福田晃、常光徹、斎藤寿始子編(2000)『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社
- 三浦佑之(1999)「昔話と神話: 古代の民間伝承」『國文學』44(14)、36-40
- 柳田国男(1938)『昔話と文学』創元社
- 柳田国男(1942)『桃太郎の誕生』三省堂
- 湯本豪一(1999)「予言する幻獣: アマ彦を中心に」小松和彦編『日本妖怪学大全』小学館、103-125
- 吉田幹生(2009)「異類婚姻譚の展開: 異類との別れをめぐって」『日本文学』58(6)、12-19

**Confrontation with the Weird and Grotesque Seen from the Perspective
of Heterogeneous Marriage Stories :
Focusing on Folklores and Myths**

Faculty of Childhood Education, Department of Childhood Education
Mami KUROKAWA

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology
Masahiro KAWAKAMI

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology
Hiroyuki SAKATA

Abstract

"Amabie", which is said to calm the plague, is booming, hoping that the spread of infection due to the new coronavirus infection (COVID-19) would end. Along with this, the degree of public attention to youkai and phantom beasts is increasing. From ancient times to the present day, the weird and grotesque, including youkai and phantom beasts, have been handed down through people's mouths and through the media. In this article, we focus on folklores and myths, and consider from a psychological and folklore perspective how people faced the weird and grotesque and tried to build relationships with them. For this purpose, we tried to reconsider the variant as having a new meaning of the weird and grotesque. We classified different marriages in myths and folklores by different kinds of marriages and different wives. Then we examined how to confront the weird and grotesque. We argued that it is important to learn from human-animal marriages now that the inclusion of diversity and the review of relationships with "nature" are required.

Keywords: Heterogeneous Marriage Stories, the Grotesque, Folklores, Myths, Youkai